

第8章 消費（2）

応用マクロ経済学 2



教員：奴田原 健悟

<http://www.kengonutahara.com/teaching>

第8章のアウトライン

第8章の授業でやること

- ① ライフ・サイクル仮説
- ② 恒常所得仮説
- ③ 消費理論の進展

教科書との関係

- ▶ 「マンキューマクロ経済学Ⅱ（応用篇）」（東洋経済新報社）の第5章

1. ライフ・サイクル 仮説

ライフ・サイクル仮説

(1918–2003) :



所得は生涯の間（ _____ ）で
規則正しく変化する

⇒ 消費者は、高所得の時期から低所得の時期へ
_____ によって所得を移して消費を平準化

⇒ 「 _____ 仮説」

モデル (1/2)

記号 :

- ▶ W : 初期資産
- ▶ Y : 退職するまでの所得 (一定とする)
- ▶ R : 退職までの期間
- ▶ T : 人生の長さ

仮定 :

- ▶ 利子率はゼロとする (簡単化のため)
- ▶ 消費は平準化したほうが望ましい

生涯所得 :

モデル (2/2)

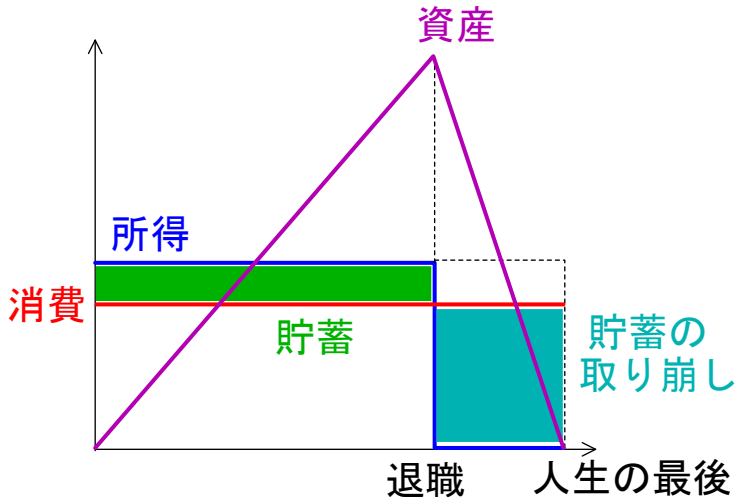
消費者は消費を平準化したいので

$$C = \frac{\quad}{\quad}$$
$$= \alpha W + \beta Y$$

- ▶ $\alpha = 1/T$: $\frac{\quad}{\quad}$ の限界消費性向
- ▶ $\beta = R/T$: $\frac{\quad}{\quad}$ の限界消費性向

⇐ 消費は、所得と $\frac{\quad}{\quad}$ の両方に依存する

ライフ・サイクルでの行動 (初期資産ゼロを仮定)



2. 恒常所得仮説

恒常所得仮説 (1/2)

(1918–2003) :



所得 Y は 2 つの要素からなる : $Y = Y^p + Y^t$

①

(Y^p) : 将来にわたって継続すると
予想される部分、もしくは平均所得

②

(Y^t) : 永続的ではないと予想され
る部分、もしくは平均所得からの不規則な乖離（マイ
ナスもある）

恒常所得仮説 (2/2)

恒常所得仮説：消費は _____ のみに
依存して決まる

仮定：消費を平準化したい消費者は、
_____ の変化に対応するために
_____ 貯蓄と借入を行う

恒常所得仮説での消費関数：

$$C = \underline{\hspace{2cm}}$$

ただし、 α は定数

← _____ の一定割合を消費に回す

ライフ・サイクル仮説と恒常所得仮説

どちらも、所得変動に対して、消費を
_____しようとするモデル

ライフ・サイクル仮説 : 所得は生涯の間に規則的に変動

⇐ 消費を決めるのは「 _____ 所得」

恒常所得仮説 : 所得は恒常所得 Y^p の部分とそこからの乖離である変動所得 Y^t からなる

⇐ 消費を決めるのは「 _____ 所得」

定額給付金の効果 (1/3)

定額給付金

- ▶ 2008年10月30日に発表された経済政策
- ▶ 日本に住所がある個人や在留外国人（「短期滞在」者を除く）を対象に、定額の現金を給付
⇒ _____ の一種と考えられる
- ▶ 財源：当初は _____ 発行は回避の方針
⇒ 税収減のため、結局、平成20年度2次補正予算で6兆6,890億円もの赤字国債を発行

この政策の効果を理論的に考える

定額給付金の効果 (2/3)

1. ケインズ型消費関数のとき

- ▶ 現在の消費は、現在の _____ で決まる
⇒ 定額給付金は現在の _____ を増加させるから、消費は _____

2. ライフ・サイクル仮説のとき

- ▶ 現在の消費は、 _____ で決まる
⇒ 定額給付金は _____ を変化させず
消費は _____

★ 赤字国債を財源としたため、定額給付金は _____ を意味するから

定額給付金の効果 (3/3)

3. 恒常所得仮説のとき

- ▶ 現在の消費は、 _____ で決まる
- ⇒ 定額給付金は _____ を変化させず
- 消費は _____ (定額給付金は _____)

ポール・クルーグマンの言葉 :



「定額給付金は米国などではほとんど貯金に回り失敗した。なぜ日本が実施するのか理解できない」

3. 消費理論の進展

ランダム・ウォーク仮説 (1/2)

(1943-) :



(恒常所得仮説) + (_____)

- ▶ 合理的期待：人々は利用可能な情報をすべて駆使して将来に関する予想を形成する

ランダム・ウォーク仮説 (2/2)

(恒常所得仮説) + (合理的期待) =
() : 消費の変化は
予測できない

$$\underbrace{C}_{\text{今期の消費}} = \underbrace{C_{-1}}_{\text{前期の消費}} + \underbrace{\varepsilon}_{\text{予期しなかった出来事による消費変化}}$$

- ▶ 予想された所得や資産の変化は _____ に反映されており消費に影響なし
- ▶ _____ 所得や資産の変化のみ消費

⇒ _____ 政策変更でなければ消費は
変化しない

行動経済学的アプローチ (1/2)

(1966-) :



心理学的な要素を経済学に導入
(_____ 経済学)

⇐ フィッシャー、ライフサイクル仮説、恒常所得仮説では将来のことも考え、 _____ 的に
消費計画をたてる消費者を想定

行動経済学的アプローチ (2/2)

消費者はそれほど合理的でない

- ▶ アメリカのある世論調査： _____ の消費者が退職までに十分な貯蓄をできていない
← 将来よりも、現在の消費の _____ に負けてしまう（消費者の選好は _____ 的）

2つの質問

- (1) 「(A) 今日1万円もらう」と「(B) 1年後2万円もらう」では、どちらを選ぶ？
- (2) 「(A) 10年後1万円もらう」と「(B) 11年後2万円」では、どちらを選ぶ？

時間非整合的な消費者 (1/3)

を考える：

(1) で (A) を選んだ人：

(今日の1万円) > (1年後の2万円)

← 「1年後」の価値を現在に直すときに、この人は
5割 _____ 割引

★ (10年後1万円) _____ (11年後の2万円)

(1) で (B) を選んだ人：

(今日の1万円) < (1年後の2万円)

← 「1年後」の価値を現在に直すときに、この人は
5割 _____ 割引

★ (10年後1万円) _____ (11年後の2万円)

時間非整合的な消費者 (2/3)

問題：以下の選択肢を考える。

- (1) 「(A) 今日 1 万円もらう」と「(B) 1 年後 2 万円もらう」
 - (2) 「(C) 10 年後 1.5 万円もらう」と「(D) 11 年後 2 万円もらう」
- Q. (1) で (A) を選んだ合理的な消費者は (2) でどちらを選ぶ？
(B) を選んだ消費者はどうか？

時間非整合的な消費者 (3/3)

レイブソンによる消費の理論

消費者は合理的ではなく、直近のことの割引率は大きく、将来のことの割引率は小さい

- ▶ 「1年後」を「今日」に1年間割り引くときの割引率は大きい
- ▶ 「11年後」を「10年後」に1年間割り引くときの割引率はそれほど大きくない

⇒ _____ が生じる

消費以外への応用例 :

- ▶ なぜ夏休みの宿題を8月末にやるはめになるのか？
- ▶ なぜ政府は借金返済を将来に先延ばしするのか？